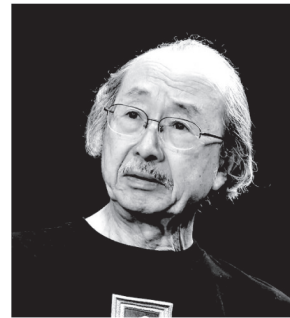


回顧：海を渡って“半世紀前の NY 赴任”③



西山 慈恩*

半世紀前となっているが、正確には 1967 年から 1968 年にかけての話である。

前々回 (2022 年 7 月号) と前回 (2023 年 3 月号) で出発から NY に着任し下宿での生活を始めたところまでの記憶をたどったが、今回はそれから家族を呼び寄せるまでのことになる。円ドル相場は 1 ドル 360 円の固定相場の時代で、ドルが貴重で NY に当時あった数少ない日系人が経営していた商店でドルを円に換えれば、優に 400 円を超えた頃の思い出である。

NY City は Manhattan, Bronx, Queens, Brooklyn, Richmond (Staten Island) の 5 つの区から構成されていて、いわゆる摩天楼のある NY というのは Manhattan の中心部と南部で、国際企業のビジネス街はそこにあるが、当時の日本からの駐在員が住んでいたのは Queens が多かった。Manhattan 中心部の高級なアパートメントはガードマンが常駐していてセキュリティは徹底していたから問題は無いものの、賃料が高く駐在員でもいわゆる主管者たる人は会社負担でそこに住んでいたが、そ

の他の人は与えられた給与から家賃を負担していたから、それは叶^{かな}わず、Manhattan の外れや、Bronx, Brooklyn は治安に問題があり、Richmond は Manhattan には Ferry で通うことになるから、残る Queens になったのだろ^うと思われる。地下鉄も Manhattan から East River を潜^{くぐ}って Queens に入ると高架となっていて最も治安の良い線であった。

そんなことで私が部屋を借りたのはその Queens を走る地下鉄の終点の前 6 つ目の Jackson Heights で、中南米や東欧からの移民者が多く住んでいたところであったから、外国人である私たちを気にする雰囲気は無かったように記憶している。

生活が始まると下着等の洗濯が必要となる。部屋には洗濯機等は付いていなかったから、週末に枕カバー (ベッド用の枕であったから、本体から外せば大きな袋だ) に汚れ物をまとめて入れてランドロマット (Laundromat) という洗濯機と乾燥機を置いている店に出かけた。店と言ってもコイ

* 丸紅株式会社 (定年退職) J.Nishiyama 連絡先 E-Mail アドレス : jion13381008nishiyama@gmail.com

ンを入れて稼働させる洗濯機や乾燥機が並んでいるだけのもので無人であった。日本でも、始まってもう10年位になるであろうか、一人住まいの者が使うのだろう、ワンルーム・マンションがある近くにその種の店を見かけることが多くなったが、55年前の日本では乾燥機はもちろんのこと洗濯機も水切りをローラーでする二槽式の洗濯機が一般的で、ドラム式の洗濯機がずらりと並び、大きな乾燥機が回っている光景は壮観であった。

初めてのことで、どのように利用するのかと店内を見渡した。利用要領のごときものが掲示されていたが、スペイン語であり、それも料金のことであった。普通の家庭では地下室に洗濯機や乾燥機を持っていて洗濯は自宅でするので、ランドロマットを使うのは、部屋を借りているような者や、それらの電化製品を持つには金銭的に苦しいという家庭であったから、店の利用者はその地域に多く居た中南米からの移民が中心ということであったのだろう。

日本では洗濯は家内の役割であったし、学生時代の下宿では、洗面器で手洗いしていたから、洗濯機を使つての洗濯には慣れていなかった。それに加え目の前にある洗濯機は今では日本でも普通となっている横ドア式で脱水までする全自動のもので初めて目にしたものである。ドアを開けて洗濯物を放り込み掲示にある額のコインを入れてボタンを押せばということは何となく分かった。で、洗剤を上部の投入口から入れてボタンを押す。

窓から回転する洗濯物が見え、水が出てきた。“これで良いんだ、どうってことないではないか”ということで、かなりくたびれていた椅子に座り、スペイン語の掲示を眺めていたら、店内で乾燥する洗濯物を待っていた、中年の女性がスペイン語で何か叫んだ。掲示から目を彼女に移すと私が使っていた洗濯機を指して更に叫んだ。見ると洗濯機の上部から泡がブクブクと出ているではないか。慌てて洗濯機に寄ると洗剤を入れたところから洗剤の泡が出ている。どうしたものかと彼女を振り返ると、やおら立ち上がってきた彼女が洗剤の入れ口から手にした容器の液を流し込んだ。泡の出はそれで止まった。彼女が何か話したがスペイン語で理解できなかったが、容器にSoftnerとあったから、^{てんまつ}顛末の理解は出来た。洗剤を入れ過ぎていたのである。

Thank you, Gracias! Thank you, Gracias! と繰

り返した。にこっとした彼女の笑顔に救われたという経過であった。彼女にしてみれば、貧しい東南アジアからの若い出稼ぎ人を助けてやったと思っていたに違いない。それを裏付けるようなことを私がしでかしたのである。彼が“E1”VISAで滞在している者とは思いつかなかったはずだ。

地下鉄で思い出すことは車両が、事故の際の火災対応を考慮したのか椅子も含めてすべてすべすべの金属製であったことと、落書きの多さであった。車両は山手線のように座席が両サイドにベンチ式に造られていて、一席ごとに浅いくぼみがあり、その席の幅が当然のことながら米国人の大人が座れるようになっていたから、腰回りの小さい日本人には広過ぎて、電車の発進や停車時に横滑りしたのが懐かしい。

高架になっていた地下鉄を降りて下宿に帰までの高架下の道に沿って小店が点在していた。その中に小さなデリカテッセンがあった。イタリアからの移民が経営していたと思われ大した客足がある店ではなかったが、大きなガラスのウインドウからは奥にぶら下げている大きな塩タラが見えていた。赴任して1か月も経った頃だったろうか、どうにも日本食が恋しくなり、あのタラを焼いたらお茶漬けが出来るなと思いつき、思い切って買って帰った。ご飯は紙箱に入れて売っていたロングライスを鍋で炊き、タラは網がなかったから箸で掴^{つか}んで火にかざして焼いた。それにホーレンソウのおしたしを加えたが、スーパーで売られているホーレンソウは日本でのように根元で切って束になっているようなものではなくて、切り取られた葉の部分だけが袋に入れられていたから、茹でて水切りをすると揃^{そろ}わないで、ぶつ切り状態になった。醤油^{しょうゆ}は入手が簡単ではなかったが、NY入りした時に泊まったホテル・パリスの近くにあった日本食品店で買ってあったものがあつた。お茶は羽田^たを発つ時に見送りに来ていた伯母さんから缶入りのものを頂いていたが、急須は無かったので、Coffee Cupに茶葉を入れ、お湯を注いで、しばらく待ち、茶葉が沈むのを待った。それらが並びなんとなく様になったが、タラを口にして驚いた。なんとも塩辛^{しお辛い}かった。そんなお茶漬けを食しているうちに涙が出てきたのは辛いからではなかった。

NYの春は東京より約1か月遅く、5月になると冬枯れていた草木が芽吹き、レンギョウが一斉に咲いた。出かけるのが楽しくなりそれを待ち焦がれていた駐在員たちは週末になると日本に比べると格段にその費用が安いゴルフにそれこそ一斉にでかけた。

丁度その頃に着任して、車もなく、ゴルフも日本ではやっていなかった者は、勢いそれに取り残された。

屋根裏部屋のような下宿に一日いるわけにはゆかなかった。どう過ごすか、NYに居るではないか見たいところはいくらでもある、まずは自由の女神をということで、地下鉄で出かけた。目指したのはマンハッタンの南端のBattery Park。そこから自由の女神が良く見えた。かつて移民が船で入ってきて目にし、心躍らせた像がそこにあった。すぐ近くにそこを訪れるフェリーがあったが、そこに行くのは家内が来てから彼女を喜ばせる時にしようと楽しみを先送りした。



沈む夕日を背にした自由の女神像

E1 VISA で来た者としてすぐ近くのWall Streetに行かないわけにはゆかないではないかと思った。世界の経済の正に中心ではないかと観光地図を頼りに歩きだした。Broadwayを北に向かって歩くと程なく左手にTrinity Churchが現れた。そこを起点に東に延びる道路、標識にWall Street。心が躍った。土曜日であったから人出は少なかったが、NY Stock Exchangeのビルがそこにあった。ビルに掲げられていた星条旗がまぶしかった。

地図によるとすぐ近くにCity Hall(市役所庁舎)があった。NY市長は前年の1966年に若干45

歳で選ばれたJohn V. Lindsayで、それまで連邦下院議員であり、いわゆる大変なイケメンであったから、ワシントンから白馬に乗って混沌^{こんとん}としていたNYに駆け付けたと言われていた。Lindsayがここで執務しているのかと見た建物は、美しくはあったが、摩天楼の中にあると、これが世界の中心地の市庁舎とは思えるほど小さく感じられた。



John V. Lindsay

引用: <https://ja.wikipedia.org/wiki/ジョン・リンゼイ>



City Hall

市庁舎を後にして、近くのチャイナタウンに向かった。既に午後1時を回っていたから昼食にしようということで、出来れば久しぶりにラーメンをと思った。猥雑^{わいざつ}な通りであったが漢字の並ぶ看板は懐かしかった。店の前に出ているメニューの看板からラーメンを探したがあるはずはなかった。Soup noodleとあった。店内で出されたメニューからまずそのnoodleを注文し、更に、これは餃子に違いないだろうということでDumplingを注文した。日本流に言えば餃子・ラーメンだ。料理が出されるまでに店内を見回した。一人客は自分だけで、何人かで料理を分け合っていた。大きな声でにぎやかであった。

Soup noodleが運ばれて来た。大きな丼でとても一人では食べきれそうではなかった。

何人かでシェアするのが慣習のようで、どうしたものかと思っていたところに、Dumplingが運ばれて来た。これも一人で食べきれぬ量ではなかった。LAでのハムエッグの一件を思い出した。Soup Noodleの味は、今から記憶をたどれば、沖縄そばのようなものでなかったか。いずれにせよNoodleもDumplingも食べ残さざるを得なかった。

食後、腹ごなしも兼ねて Bowery 通りを北に向かって歩いていたら、向かって来た大きな男が手のひらを差し出して何か叫んだ。咄嗟なことで「何？」という顔をしたと思う。One nickle! One nicke! 物乞いであることが分かったので、I can't understand English! と答えて急いで離れたら、それ以上は追ってこなかった。米国の硬貨は最小単位の1セントから5、10、25、50のものが一般的で、50セント、100セントとなる1ドルのものもあるが、これらはまれに手に入るという流通状況で、これらを通称で下から、ペニー、ニッケル、ダイム、クォーター、ハーフダラー、ダラーと呼んでいる。物乞いが言っていたのはこの5セントのことであった。



週末が明け、会社の先輩にその話をしたら、「そんな！ 英語で答えているじゃないか！ 危ないよ、そもそも Bowery を一人で歩くなってNYの治安が分かっていないからやれたことだぜ。」と諭された。今思えば5セントの物乞いとはいう感じだが、



左から ペニー、ニッケル、ダイム、クォーター、ハーフダラー

当時の地下鉄の1乗車代が20セントであったから、それなりの価値はあったのだろう。ちなみに現在の治安はぐっと良くなっている様である。

金曜日の終業後に同じころ赴任し、同じように下宿生活をしている仲間と、週末の夜をどうするかと思案していたら、当地のベテランとなっていた先輩が、音楽会を勧めてくれた。「カーネギーホールでカラヤンでも聴いたら！」思いもつかないことだった。

赴任前の日本ではクラシック愛好者の中ではカラヤンは神様のような存在だったし、世界のカーネギーホールではとは。

「チケットが買えるんですか？ べらぼうな値段では？」

「買えると思うよ、値段も高くない、カラヤンはNYでは日本ほどもてはやされてはいないから……」

おっかなびっくりで出かけ、カーネギーホールのBox office（切符の販売窓口）で聞いたら、オーケストラ席のそれも前から数列というものが残っていた。値段の記憶は薄れているが、法外なものではなかったから躊躇わず買った。神様の演奏を世界のホールでと興奮して席に着き、開演を待った。すらりとした神様が下手から現れ、舞台の中央に置かれていたチェンバロの前で拍手の中で一礼し、背を向けて一呼吸置き右手を挙げ、降ろすとあっという間に演奏が始まった。BachのBrandenburg Concerto No5でカラヤンが自らチェンバロを演奏し指揮したものだった。

帰宅後、日本に残してきた家内に、彼女はクラシック音楽が好きで、結婚前に勤めていた会社にLPレコードを売りに来ていた男から月に1枚位をなけなしの小遣いから買っていたような女であったから、“神様の演奏をカーネギーホールで”と手紙を書いた。

自動車の運転免許の取得は、まず筆記試験を受けることから始まった。日本では運転免許証は各県の公安委員会が発行するから具体的には警察署で手続きをするが、米国では各州の行政機関の一つであるDMV (Department of Motor Vehicle) だからかなり感じが違った。そこに出向き、筆記試験の申し込みをし、Driver's manualを入手する。このmanualは、日本の講習所でくれるような教則本で、交通規則を中心に運転で気をつけることが

書いてあるものであった。今ではネットで検索すると出てきてその詳しさに驚くが、当時は薄い手帳を横長にしたような簡単なものであったように記憶している。

試験では20問に14問正解なら合格ということであった。試験は英文とスペイン語の様式があった。今ではそれに日本語が加わったと聞いている。この試験については歴代の駐在員が受験したときの問題を持ち帰っていて、それをまとめて見て行けば答えられるもので、なんということもなかった。

後日、実地の運転練習を認めるものとしてのLearner's Permitが送られて来たので、運転練習をすることになるが、それは街中にDriving schoolと看板を出している個人経営と思える人物から習うのが一般的であったと思う。日本のような大きな組織の講習所のようなものはあるのかないか調べもしなかった。

週末にそのようなところを訪ねると、太った男が出てきて、事務所のような小店の前に駐車していたかなりくたびれていた車に案内し、Keyを渡し運転席への乗車を指示し、本人はドガッと助手席にすわり、Ok, Let's go! ということで練習が始まった。Keyを挿すとTurn clockwise! 余計なことを言わなかったのは、こちらの英語がおぼつかないからか、彼の性格からか分からなかったが、こちらとしてはそれでよかった。Straight ahead! Turn left! Turn right! Slow down! そこまでは良かったが、Pull up over there! には?? だった。今まで習ってきた英語では“Pull”は「ひっぱる」でしかなかった。「車を止める」ということであることが分かったのは、状況と雰囲気からであった。(辞書をみると、確かに1ページを超えるPullの説明の最後の方にチャンと出ている。)

そんな練習を路上で何回か繰り返し、最終日にはHigh way (高速道路)に入った。近くにあったGrand Central ParkwayでParkwayというのはTruck等の大型商業車は走れない高速道路であったから、それなりの練習者への配慮はあったのだろう。しかし慣れない高速にカーブではハンドルさば捌きが遅れてレーンを外れかけ隣の太った大男が私の握るハンドルに手を掛けた記憶がある。今、手元にある当時EXSONのガソリンスタンドで入手していたRoad Mapで確認してみると、その場所

はLa Guardia Airportのそばの大きく湾曲していた所だったのである。一般道路上での練習でなんとも荒っぽい。練習を終了してのDMCでの実地運転試験も、決まっている場所ではあったが一般道路上であった。実地試験の記憶は薄れているが、Parallel Parkという路肩への駐車を歩道の端から15センチ位でやればOKになるからということで、その点だけを気にしていた記憶が残っている。

車はDodgeのDartという車を買った。小型車であったが、当時の日本での普通車より大きかったと思う。価格やその代金をどう調達したのか記憶が無いが、恐らく会社の貸付制度があったのだろう。Dealerに車を取りに行ったときに契約時に払った手付金の残り代金のためにCertified Checkを用意した記憶がある。金額がかなり大きかったから、支払銀行がChecking口座残高からその額をそのCheck用に充当するために確保しておくものである。

ところで、日常生活で支払いには現金でない場合はPersonal Checkを切った。日本では富裕者の間ではそれもあったのだろうが、当時普通の会社員が自分の個人的支払いにCheckを切るということはなかったから、とても新鮮なことであった。そのために着任早々に銀行に出かけChecking Accountを開設した。日本の銀行も既に進出していたが、商取引のみで個人との業務はまだ開始していなかったから、使った銀行はFirst National City Bankで何か急に国際人になったような気がしたものである。

春に着任し半年以上が過ぎて、感謝祭の日が来た。社長秘書をしていた中年の日系女性から自宅に招待された。ほとんどの店が当日は営業していなかったから、独り身の者にとってはそんなことがないともうどうにも寂しいことになるのを思っただけであったのだろう。

ご夫妻が敬虔なキリスト教徒であったかどうか、焼いたターキを主菜にお祈りをしたかどうか記憶にないが、食卓の席で、先に記したカーネギーホールの一件を話題にしたら、彼女が「あなたたち若者に世界の一流を経験させるということも会社は狙っていると思いますよ。」と言ったことはなぜか鮮明に記憶している。